

一、加藤清正、高德公を評す

我本藩の世祖高德公は、驍勇の爲人にして亂世に生長し、英武傑出の事は凡そ衆人の所知なり。予村井氏の筆記並世子へ貽し給ふ遺言を考へ觀るに、文徳を備へざれば武勇も用を成さざる事を得意ありとみえたり。難有御志ならず哉。太閤も亦善く人を知るの明ありとみえて、此人を以て秀頼公の大傅となし給ふに、不幸にして太閤薨去の翌年、群臣をすて給ひぬ。此公今年世に長らへ給はゞ、天下の大勢如何あらん哉計がたし。予或人の編める關原記大全といふ記録を看待るに、其内にいへる事あり。肥後守加藤清正其親友に語りて云。大納言利家は、晩年に及びては文學の志ありとみえて、或時太閤薨去の後、浮田秀家・淺野幸長及某を招き物語せられし言の次に、大節に臨て不可奪君子の人か君子の人也と、古語を引てぬしの志を示し給ふ。其頃は吾猶文盲にして其意をも尋ね問はず候に、近年は朝夕論語を讀候て此語意をも解し申候。今の世に在ては別て此語を事とせず候はゞ、恐くは不義に陥り候はん。利家も元來不學に候故、王霸儒佛などの議論に於ては、卒去の時

に至ても其趣は有之候と、清正語り被申候よし記し置ぬ。清正もかゝる所に心附あらんとはおもはざりし、誠可嘉尙。

一、雨森孫太郎一番首を讓る

關原大全八

むかし長湫陣にて森長一の家臣山田八右衛門、一番鎧を入ながら、二番鎧を合せたる千田主水に功を讓ければ、又主水は我働を山田には劣りたりとて、互に其功を強て讓る。又天正十八年小田原陣の時、前田利家の臣雨森孫太郎、一番に首級得て持來りながら、某が首を不取うち、大音藤藏高名をしたりと名乗候聲を承候しうへは、一番首は藤藏にて候はんと、他人の功を顯はせり。皆武士の法とすべし。

一、本多大夢小屏風の繪を褒めらるゝ事

微妙公小松御隠居の時、本多大夢に御茶可賜とて、或年の夏御書院にて御茶被下。風呂先の小屏風、杉骨の間に狩野探幽へ御好被成、松原の景色に雁・鳧・鶯・鶯等松の梢に群る體を圖せり。此繪を大夢殊の外ほめ、御好みを奉感よし申候。御近習の衆へ、大夢は何と挨拶候哉と御尋被成候に付、右の趣申上候へば御喜色勝れて御みえなされ候。追て

何も大夢へ尋けるは、水鳥の松の梢に群居候事は、見も聞も不仕事に候。難心得事に候。甘心の體は如何の故に候哉と申ければ、古歌に「雁が音の越路の道の遠ければ羽をやすめんと米嶋の松」と承り候へば、此意にて御好み被成たるものと存候旨被申候。話長

或人云。二十一代集卷末の内

越路より飛つかれたる雁がねは羽をやすめけり米濱の松大夢被申候歌は、此集歌にて候はんかし。

一、神童山田宗見の詩

甲辰年只今山田宗見と申奇童に相見いたし候。當年十三歳の由、それよりも内に見え申候。史記・前漢書等讀過、唯今文苑英華を見申旨。詩作も好み候由。則當座に近作に候とて出申候。驚入申候。中々十三の童の詩とは見え不申候。

遊仙詩

蓬萊島裏紫簫聲。白石山中金瑟清。
盛書玉盤如火燄。更邀王母佩鈴々。

班婕妤

深宮夢覺漏聲遲。羅幙寂寥燈滅時。

幽意一題秋扇後。西風故々又來吹
御慰に書付進申候。王勃十三にて文材傑出と申事、不珍儀と存候。何とぞ經學にもとづき候て、よく成立候へかしと存候。親父は山田宗圓と申、公儀醫師にて候。

二月二十一日

鳩 巢